
レッツゴー デュエリスト！

次元賄賂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レッツゴー デュエリスト！

【Nコード】

N 8 7 5 5 Y

【作者名】

次元賄賂

【あらすじ】

何気ないデュエルから天領アイトのデュエリストとしての運命は加速していく。

この小説は作者の処女作となります。至らぬ部分が多いと思いますが、よろしく願います。

第一話 その時運命は動いたかも（前書き）

どうも、ジゲン幽閉に魔宮のワイロを喰らってしまう次元賄賂です。

GXにシンクロ？ おれには無理だ！ ならオリジナルだ！ というコンセプトで書きました。

第一話 その時運命は動いたかも

どうしてこんなことになったんだっけ？

俺、天領アイトは児童公園のデュエルリングを見上げながらがらそう思ってしまった。

きつかけ自体はほんの些細なことだ、同じクラスの宮木がアンティデュエルをしかけてきやがったのだ。

狙いは俺のもつカード、シンクロモンスターとそのチューナーモンスターをセットでよこせと言ってた。

なんで持っていること知っているのか聞いたら授業中に眺めているのを見たらしい。高校受験前だというのに精神を安定させようとカードを見ていたのが仇になったか。

さらになぜ欲しがるのか聞いてみたけど、宮木はデュエルアカデミアを受験するため、実技試験に必要ならしい。筆記試験で通る可能性もないくせにな。

宮木はクズだ。正真正銘のクズだ。なんでデュエリスト語ってんのと叫びたくなるぐらいクズだ。小学生相手に無理矢理アンティデュエルをしかけて巻き上げる、テストのたびにカンニング、現金をかけてデュエルすることなんて中学に入ってからしない日はなかったぐらいだ。

ネズミのような出っ歯、不摂生による肥満、脂ぎった髪と肌、外

見から入ったクズだ。

大事なことだからもう一度言う、宮木はクズだ。

そんなクズが入手困難なシンクロモンスターを欲しがるのも当然だろう。

当然、俺は断ったしイヤだと言って拒否して誰もいない放課後の体育館裏をあとにしようとした、でもあのクズはしつこく食い下がりが、お前が持つていてもしかたないだろう、デュエルの成績そこまですぐに良くせにとベチャベチャと唾液を散らしながら言ってきたが、成績に関してはお前が言えたことじゃないだろと思いつつ、俺は宮木を無視してさっさと帰ろうとしたが宮木の取り巻きが道をふさいでいた。

「そう簡単に逃がすとおもったか？ このオレがお前みたいな力も逃がすわけないだろ」

どうやらアイツは俺からカードを巻き上げるのは確定事項のようです。

そして今、宮木のヤツとその取り巻きがまだ小学生がデュエル中にもかかわらずデュエルリングに観戦している子供たちごと蹴散らし、ケータイを使ったと思えば同級生や下級生をギャラリーとして呼び出し始めるし、やりたい放題だった。

俺はデュエルリングに上がり、カバンからデッキを取り出して準備しているところに宮木が話しかけてきた。準備してる時ぐらい静かにしてくれよ、まったく。

「負ける準備はできたか？ 逃げてもいいんだぜ、でも逃げられないけどな」

何が負ける準備だ、デュエルの授業のとき俺から逃げてたくせに。

「別に逃げやしないさ。負けて逃げるのはお前だろ？」

「いいだろう、そんなに負けたきや今すぐ叩きのめしてやるよ！でもその前にだ、アンティの確認だシンクロモンスターとチューナーモンスターを見せる！」

「…ほらよ。お前が欲しいのはこれで間違いないんだな？」

「アー、そのとおり！ そいつらで違いなげ」

ガチでウゼエ！

「おい、だったらお前は何を賭けるんだ？」

「はあ？ どうせ俺が勝つに決まってるのにそんなこと決める必要なんてないだろ？」

「……お前がどこまで行ってもクズなのはわかった。さっさと始めよう、お前のことは負けた時に決めさせてもらう」

「ハハハ！ んじゃあ、いくぜ！」

さあ、楽しませてくれよ…

「デュエル!!」

天領

LP 4000

手札：5枚

宮木

LP 4000

手札：5枚

「先攻はおれからだ!! ドロー! おれはダブルコストンを召喚!」

《ダブルコストン》 攻1700/守1650

「さらに二重召喚を手札から発動、これによりおれはこのターン二回通常召喚ができる! そしてダブルコストンをリリースし、デビルゾアをアドバンス召喚する!」

《デビルゾア》 攻2600/守1900

「……なんでいつもorzのポーズなのさ、でもデビルゾアってことはまさかあれをだすのか?

「伏せカードを2枚セットしターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

うーん堅いな、でも壁自体はそんなに高くないってところかな。だってあの伏せの一枚、絶対メタル化
・魔法反射装甲だな、もう一つはおそらく正統なる血統カリビングデッドの呼び声かな。

デビルゾア並べてタコるパターンか。

ま、この手札だと十分に守れる。

「マッシブ・ウォリアーを守備表示で召喚！」

《マッシブ・ウォリアー》 攻 600 / 守 1200

「伏せカードを二枚セットしターンエンド」

天領

LP 4000

手札：3枚

場：マッシブ・ウォリアー守備表示

伏せ二枚

宮木

LP 4000

手札：1枚

場：デビルゾア攻撃表示

伏せ二枚

「ハッ、大口叩いた割には随分とシケたカードじゃねえか。オレのターン！ ドロー！ 伏せカードオープン！ メタル化・魔法反射装甲を発動！ このカードは攻撃力・守備力300ポイントアッ

プの装備カードとなり、これをデビルゾアに装備する！」

デビルゾア 攻2600↓2900/守1900↓2200

「そしてメタル化・魔法反射装甲を装備したデビルゾアを生け贄に捧げることにより、メタル・デビルゾアを特殊召喚する！」

《メタル・デビルゾア》 攻3000/守2300

うわあ、ホントにやっちゃった。というより、よく召喚条件をそろえることができるよ。

「そして死者蘇生を発動！ デビルゾアを墓地から復活させる！そしてもう一つの伏せカードオープン！ メタル化・魔法反射装甲を発動！ これをデビルゾアに装備する！ もう言わなくてもわかるよな、メタル化・魔法反射装甲を装備したデビルゾアを生け贄に捧げることにより、メタル・デビルゾアをデッキから特殊召喚する！」

《メタル・デビルゾア》 攻3000/守2300 二体目

「攻撃力3000が二体も…」 「あいつオワタww」 「もうこのデュエル決まったな」

まさかの二体目…。

そういえばアイツ授業でもこのパターンでゴリ押して勝つことがあったな。

「カードを一枚セットしバトル！ メタル・デビルゾアでマッシュ・ウォリアーを攻撃！」

「マッシブ・ウォリアーの効果1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない」

「ならもう一体のメタル・デビルゾアでマッシブ・ウォリアーを攻撃！メタル・エックス・シザース！」

「トラップ発動！くず鉄のかかし！このカードは相手モンスター1体の攻撃を無効にし、発動後このカードは墓地へ送らず、そのままセットする」

「チツ、めんどくせえカードを…、このままターン終了だ！」

宮木

LP4000

手札：0枚

場：メタル・デビルゾア攻撃表示

メタル・デビルゾア攻撃表示 二体目

伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！」

まさか二体目のメタル・デビルゾアがくるとは。攻撃力3000はキツイな、壁がさらに固くなったただけだけど。

ま、あの伏せカードを割に行きますかね。

「手札からダブル・サイクロンを発動！自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して選択したカードを破壊する！僕は伏せ力

ード一枚と宮木の伏せカードを選択、そして破壊！」

「くっそ、ミラーフォースが…、伏せカードを破壊してもメタル・デビルゾアは越えられない！」

「…俺の破壊した伏せカードはリミッター・ブレイク、このカードは墓地へ送られた時、自分の手札・デッキ・墓地からスピード・ウォリアー1体を特殊召喚ことができる！俺はデッキからスピード・ウォリアーを守備表示で特殊召喚する！」

《スピード・ウォリアー》 攻 900 / 守 400

「そんな雑魚モンスターを並べたところでなにができる！」

「意味はあるさ、チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを手札から通常召喚！」

《ジャンク・シンクロン》 攻1300 / 守 500

「チューナーモンスター？ まさか！」

そんなにシンクロモンスターが欲しいんなら見せてやるよ、シンクロ召喚ってやつをな。

「俺はジャンク・シンクロンとマッシュ・ウォリアーをチューニング！」

3 + 2 〃 5

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンク

口召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻2300 / 守1300

「すげー！ ホントにやりやがった！」 「シンクロ召喚ってこんな簡単にできたっけ？」 「かつこいいいなジャンク・ウォリアー！」 「今はそんなことどうでもいいよ！」

ギャラリーうつさいつてば！

「悪いけどこのカードとの付き合いは長くてね…、使い方ぐらいわかっているのさ」

「し、シンクロ召喚しても攻撃力はメタル・デビルゾアには届いていない！ このデュエルお前の負けだ！」

「まあ、そんなに焦るなよ。 ジャンク・ウォリアーの効果発動！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスター1の攻撃力の合計分アップする！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻2300 ↓ 3200 / 守1300

「攻撃力がメタル・デビルゾアを超えたあ！？」

「バトル！ ジャンク・ウォリアーでメタル・デビルゾアを攻撃！ スクラップ・フィスト！！」

「う、うわあああー！！」

宮木 LP4000 ↓ 3800

「カードを一枚セットし、ターンエンド」

天領

LP4000

手札：枚

場：スピード・ウォリアー守備表示

ジャンク・ウォリアー攻撃表示

伏せ二枚

宮木

LP3800

手札：0枚

場：メタル・デビルゾア攻撃表示

伏せ なし

「おっ俺のターン、ドロ…。バトル…、メタル・デビルゾア
でスピード・ウォリアーを攻撃…」

「トラップ発動！ くず鉄のかかし！ 攻撃を無効にし再びセッ
トする！」

うわぁ…、宮木の顔だんだん青くなっていくぞ。取り巻きも気づ
いたらいなくなってるし。

あーもう、打つ手はありませんってやつか。戦意消失してるし、
サレンダーすめようかな？ でも最後までやりたいから申し出き
ても却下するか、サレンダーって相手の同意があってはじめて成り
立つし。

正直言って俺自身このデュエルはただで終わらせるつもりなんてない。

宮木にはきつちり負けてもらう。

それに何よりデュエルって楽しいし。

「このままターンエンド…」

宮木

LP 3800

手札：1枚

場：メタル・デビルゾア攻撃表示

伏せ なし

「俺のターン！ ドロー」

よし、このターンで終わらせれるな。

「手札からニトロ・シンクロンを攻撃表示で召喚！」

《ニトロ・シンクロン》 攻 300 / 守 100

「そしてスピード・ウォリアーを攻撃表示に変更！ バトル！
ジャンク・ウォリアーでメタル・デビルゾアを攻撃！」

「あ、あ…あああ、うわあああ！」

宮木 LP 3800 ↓ 3600

「まだだ！ スピード・ウォリアーで直接攻撃！」
ダイレクトアタック

宮木LP3600↓2700

「はっ、ははは。まだ、まだLPは残ってる！ 次のターンがくれば…」

「残念、お前に次のターンなんてないよ。トラップ発動！ 緊急同調！ このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する！ 俺はジャンク・ウォリアーとニトロ・シンクロンをチューニング！ 集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

《ニトロ・ウォリアー》 攻2800/守1800

「これで終わりだ！ ニトロ・ウォリアーで直接攻撃！」
ダイレクトアタック
「マイト・ナツクル！」

「こんなはずじゃなかったのにいいいいー！！！！」

宮木LP2700↓0

「すっげー！ あの宮木に1ダメージも喰らわずに勝ちやがった！」
「宮木の不敗（腐敗）伝説もここまでか」 「あれこのデューエルってアンティなんだよな？ 天領は宮木をどうするんだ？」

…すっかり忘れてた、割と楽しんでいたしな。 敗戦処理どうすっかなー、別に欲しいカードなんてないしアンティでもらっても後

味悪いだけだもんな。

さて負けたヤツの顔でも拝みに行くかな。デュエルリングから降りて反対側に行こうとしたら、宮木はその肥満体には似合わないさまざまなスピードで公園の出口へ向かって逃げていた。

あつ！ 転んだ！

「いったいアイツのどこにあんなスピードをだせる力があるんだ？ 狂走。キスでも飲んでんのか？」

あそこまで見苦しいと言うことが無くなってしまふな。

さて、帰るついでにスーパーでジャンクフードでも買おうとしますか。これ以上この場にいたら明らかメンドウなことになるな。宮木が集めたギャラリーが好奇の目で見てくるし。

そして次の日の学校への登校途中。

やたらと…、周囲からの視線がキツイ。

「あの人がシンクロ使うつて人？」「んー？ よく見たらそんなに強くは見えないよね」「いや本当に昨日すごかったんだって！」

そんなにシンクロ召喚が珍しいか？ さつさと教室にいくか…。

教室に行けば助かる、それはある意味正しかったと言える。

でも俺はそれを間違いだと改めることになる。だって教室には。

「なあ、何でシンクロデッキ使えるぐらい強いのに、授業じゃXYZデッキなんだ？」

「ねえねえ！　いつシンクロモンスター手に入れたの？　とかどこで手に入れたかおしえて！」

「宮木のヤツどこ行っただかしらね？　オレ、アイツにカード借りパクされてんだけど」

質問攻めという永続トラップが待ち構えていたんだから…。

キンコンカンコン…

「いつまで騒いでいるつもりだ！　さっさと席に着け！　HRを始めるぞ！」

さすが葛木先生だ、俺の周りにたむろしていたヤツラが蜘蛛の子を散らすように席に着いて行っただぞ。

「まず初めに宮木は家庭の事情により今日をもって転校することになった。」

…なんか、この教室の半分が絶望に包まれたんだが。なに？　お前ら、宮木ごときにカツアゲされてたの？

「それと、今から宮木にアンティでとられたカード、現金とられたヤツは一週間以内に出てこい。言わなくてもわかるな」

今、学校中でイヤッホウーーーーーウ！！　って声が聞こえた気

がする…。

なんだかんだいって宮木すごいな、学校全体のデュエリスト達に三年間勝ち続けるなんてな、でもクスだったけど。

「あと最後に天領、オマエ今日の授業受けなくていいから今から職員室な」

どうやら先生はカウンタートラップだったようです。

はい、今葛木先生に連れられて職員室かと思いきや、校長室に連行されましたよ。

葛木先生は事務的にノックをしてから一秒も待たずにドアを開け、そこには校長と見知らぬスーツ姿の女性がいた。校長は相変わらず柔和な笑みを浮かべているが、女のほうはなんというかピリピリしている、一言でいえば常在戦場って感じた。

「校長連れてきました」

「葛木先生あとはこちらに任せて自分の授業に戻ってください。今日は一年生の実技試験のはずでしょう」

「ええ、今年の一年坊は気が早くってしょうがない。では失礼します」

そう言って葛木は自分の職場に戻っていった。

そしてこっちが口を開く前に校長が口火を切ってきた。

「では天領アイト君、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。ただかだか不良生徒を叩きのめしたぐらいで退学も停学もありませんから。さっ、どうぞ自由にして」

そう言われて校長室には必ず備え付けられているソファに座ってみたが、さっきからチラチラとあの女が見てきやがるのが気になる。ちよ、こつち見んな。

「では落ち着いたことですし、こちらの方を紹介しましょう。この方は菅原冴子といいまして、デュエリスト倫理委員会の幹部であり海馬コーポレーション教育開発部門の顧問をなされている方です」

おい、そんな簡単に人の職業バラしていいのかよ。菅原、機嫌悪くなってるぞ。

「菅原と申します。それでは天領アイト君、あなたには二つ話があります。まず一つめは倫理委員会として聞きますが、昨日あなたは宮木伊佐男とデュエルをし、あなたは勝利し宮木は負けた。これは事実ですね？」

「はい間違いありませんけど、それが何か？」

「いえ別にこれは単なる本人確認ですのであまり意味はありません」

どうも話は長くなりそうだから簡単に説明すると、宮木のヤツは入学当初から好き放題やっていたらしく、当然倫理委員会は目を付けたわけだが、それでもあいつは警告を無視するどころか逆に中学在学中はデュエルに負けない限り自分のしていることは見逃せと言

つてきたらしい。委員会としてはそんなに長くはもたないだろうと見ていたのだが、宮木は予想を上回り、昨日に至るまで倫理委員会所属のデュエリストにも勝ち続けてしまい委員会は何もできない状態だった。

「でもまあ今はそんなことは関係ないんですけどね。だってあのガキ負けてしまいましたし、今頃取調室でキツイおっさんにどやされているでしょう」

…どうもこの人、宮木に相当まいっていたようだ。

「それでは残りの話は海馬コーポレーション教育開発部門の顧問としてさせていただきますね。天領君、あなたはこの学校はデュエルアカデミアとは別に海馬コーポレーションからの支援から成り立っているのを知っているかしら」

今初めて知ったぞ、こんな田舎の学校がそんな大企業がスポンサーなんて思いつかねえよ。

「やつぱり知らなかったんですね、他にも支援を受けているところはあるんですけど特にここは我が社の社長、つまり海馬薫子がOGだから優先的に支援が行われたのよ。この地域の学校と比べてみて、デュエルの授業、設備そして高校受験の推薦の優遇、どれをとってもありえないくらい充実してるでしょ？」

ゴメン、全然気づかなかったわ。

「それでね、海馬コーポレーションは支援を行っている学校から代表、そしてジュニアリーグの選手を招待して、インダストリアルイリ्यूジョン社と共催で非公式に大会をすることが決まったわ。

ここまで言えばわかるわね、あなたにその大会にこの中学校の代表として出場してくれるかしら」

「……別に出ること自体はいいんですけど、なんで非公式なんですか？ 大会自体は問題じゃないんでしょう？ つーか何で俺を？」

「あなたが代表として選ばれたのは、宮木の代わりよ。本当ならあのガキが行くことになっていたんだけど、今そこそこじゃないでしょ。それに三年間無敗だった宮木を倒した時点で、その実力は申し分ないわ。さらに付け加えれば昨日のデュエルを見て、社長自らが指名したそうよ」

社長ヒマだな。

「というわけだから、社長が出てきた時点で強制だから大会参加同意書にサインお願いね」

菅原さんはスーツケースから同意書とボールペンを取り出して机においた

別にそういわれなくても出るって。どんなデュエルが待っているのか楽しみだし。僕はボールペンを手に取って同意書にサインした。

「では同意も取れましたし、大会の概要の説明をしますから申し訳ないんですが校長先生は席を外してくれんか。」

「あっはい、それでは天領君、失礼のないように」

ホームグラウンド
そうして校長は自分の校長室から追い出されていった。

「んじゃ、気を取り直して大会の概要の説明をしますね。まず大会名はブルーアイズカップといいます」

「…ブルーアイズカップってまさか！」

「はい、4枚目の青眼の白龍が優勝賞品となります」

はい？

「ちょ、ちょっと待ってください！ 青眼の白龍って海馬薫子の持つ三枚だけしか存在しないんじゃないんですか？！ ていうかそれが優勝賞品じゃないのか？」

「社長はあのカードを絶対手放しませんよ。聞いたことありません？ 青眼の白龍には幻の四枚目が存在すると」

「た、確かにそんな噂がネットで飛び交っていた時期もありましたけど。でも事実関係がつかなくて結局噂は噂すぎなかったって…」

「しかし四枚目は実在します。ネットでその噂がひろまった時期にインダストリアルリユージョン社が四枚目を破産寸前のカードコレクターから高額で買い取っており、その事実をコレクターが噂がとして広めたんです」

破産寸前って…、たしか青眼の白龍の相場価格は軽く三千万超えてた気がする。そりゃ破産するわ。

「それなら辻褄が合いますけど、なんでそんなカードを大会の賞品にしてしまうんですか？ 役目を終えているならそのまま眠らせ

ればいいのに」

「いえ一年前のことになるんですが社長とペガサス名誉会長との会談において、四枚目の青眼の白龍をこれからの未来を担うデュエリストに渡せば問題はないだろうと判断し、四枚目自体これまで一度もデュエルで使用されず保存状態も悪化していたため、それを最高の状態まで修繕及び復元し、新たにデザインしたサポートカードともに、この世に解き放とうというのがこの大会のコンセプトになります。最後に非公式にしたのは馬鹿な大人の手に渡らないようにするためです。これで話は終わりになりますが、何か聞きたいことはありますか？」

この女、息継ぎなしでしゃべったぞ。

「えーとなんで教育開発部門なのに説明しに来たんですか？ 他の部署の仕事なんじゃ…」

「本来イベント広報部門の仕事なんですが、選抜対象者が支援校の人間のためそれぞれの担当している学校にいけば早いだろうという理由からです。秘密裏に行う大会のためヒマなヤツがいないというのもありますが」

教育開発部門もヒマなんかい！ ていうかアンタ社長の母校担当なのにヒマしていいのかよ。

「それではこちらが当日、海馬ドームへの旅券を兼ねた招待状となります。大会開催は五日後の十一月十九日となります。必ず来てくださいね。それではわたしはこれで失礼します」

俺に招待状を手渡して菅原さんは校長室から退室し、入れ替わり

で校長が入ってきた。

「天領君、今日から大会までの間、学校への登校は免除するよう
にと言われておりまして…、受験まで少ししかないのでに厳しいスケ
ジュールになりますが、私は君が大会優勝を心から願っていますよ」

「え、じゃあもう帰っていいんですか」

「今日から五日間そうなりますね」

ラッキー！ 五日間遊べるぜ！ というかデュエルしたい！ シ
ンクロデッキ

「それじゃあ、俺は帰りますね。失礼しまーす」

校長室から出た俺はまっすぐ教室に向かった。目的はカバンだ、
授業中の教室に入り教師とクラスのヤツラがいつせいに注目してき
たが、今の俺にそんな些細なことなんて気にしてられない。何しろ
久々に本気のデュエルができるかもしれないんだぜ？

この中学校の入ってから、デュエルの楽しさを分かち合うこと
ができるライバルってやつがいなかったからな。それなりに出来る
ヤツは勿論いたが、その程度のやつはその程度だ、全力を出し切れ
ない。

自分の席からカバンを回収して、授業中の教師に早退すると伝え
教室中の視線を集める中、退室した俺は学校をあとにした。

「さーて、まずはデッキ調整とカードの補充だな。五日間だけじ
ゃあ足りねえかもしれねえ」

それでも全力でやれることをやるだけだ、これは昔から変わっていない。

第一話 その時運命は動いたかも（後書き）

誤字脱字、アドバイスがありましたらどうかよろしくお願いいたします。

主人公設定

・天領 アイト

身長 167cm

容姿 服装 ・外見は目の色を緑色にした風のステイグマの八神和馬

・黒ジャケットの下にデジモンのギルモンのお腹のマークがデザインされたシャツをきている。

・シャツの色は白色 マークの色は赤色

・ズボンは紺色のジーンズ

使用デッキ ・メインは遊星シンクロデッキ

・サブでXYZユニオンデッキ

小学校に入る前に両親が海外赴任するときにシンクロデッキをもらい、それを使って小学校時代はデュエルを楽しんでいたが、高学年に上がるにつれ、さらなる強敵とのデュエルを求めるようになるが、小学校には彼とまともにデュエルできる者はおらず、小学校卒業までデュエルを挑んでも断られるという状況が続いた。

そして中学校に入学し、メインであるシンクロデッキは使用を控

え所持するだけで、授業や普通のデュエルではXYZデッキを使い、
そこそこ強い奴として見られ、本人は全力でデュエルできないこと
が苦痛でしかたないという状況が続いていた。

第二話 黒い風に氣に入られたかな（前書き）

禁止・制限に関しては2011年9月1日適用リストを採用しています

第二話 黒い風に気に入られたかな

1月19日大会当日、俺は五日間の準備期間を三日間に変更せざるを得なかった。

え？　なんでそんなに短くなったって？

はっはっはっ、菅原がくれたあの招待状に書いてあったのよ。1月19日午前7時エントリー終了、海馬ドームにて。

四日目の朝、それに気づいてあわてて荷造り、デスキとデュエルデイスク、財布、招待状の用意、他にもいろいろあったけど、招待状の旅券としての機能をフルに活用し、ネオドミノシティについてホテルにチェックインした直後に菅原から電話がかかってきたときは脱力したわ。

あと菅原の電話の内容は「まだ準備すらしていないようだ、ジエット機せ迎えに行けと社長が…」

もう社長ええねん。

まあ、そんなこんなで五日目はホテルから海馬ドームまで何分かかるか測ったり、パックを剥いてカード補充したり、デスキ調整したりして、また菅原から電話がかってきて、当日午前5時に迎えに行くといわれたり何ともいえない一日だった。

話を当日にもどすぞ。午前5時キツカリに菅原が惰眠をむさぼる俺を叩き起こし、身支度させ、朝飯替わりの、ウィダー。リー、カロー。メイト、ポ。リ、アクエリ。スを移動中の車内で押し込まれ、そして5時半に言われるままエントリーをすませ、選手控室に放り

込まれたところである。

控室はオレ以外誰もおらず、ただでさえ広いのが虚しさに拍車をかけていた。

いいね、暖房が利いていて静かだし寝るのにはピッタリだ。

思ったら即実行不足している睡眠時間を取り戻すため、ソファに身を預け目をつむろうとした時だ、開く気配のないドアが開いたのは。

俺は睡眠を中断し、誰が来たのか見たら、言葉を失った。

そこにいたのは女、それも身長180cm以上の。

あと外見がヤベえ、高身長にふさわしい出るところが出たプロポーション、背中までかかる金髪、膝下まである黒コートに白シャツ、ヴィンテージのGパン、顔は切れ長の目につくりは日本人っぽかった。ハーフかな。

そいつは、ダルそうな目でこっちを見ると、黒コートをひるがえして俺の座っているソファに座って話しかけてきた。

「なあ、開会式の間知らないか？ 何も言われずにここに放り込まれたからさ、わからねえんだ」

日本語しゃべれんのかよ、えらい軽いな。

「いや、俺も似たようなもんだからな、何も言われていない。パンフレットでもあればいいんだがな」

「やっぱりそんなもんか。どうせあのでかいテレビで開催時刻を映し出すんだろつよ。それよりアンタも青眼の白龍ねらいかい？」

「いや、ただ単にデュエルしにきただけさ。あとアンタもつてど
ういう意味だ？」

思い出すのも億劫だと言わんばかりのよう様子でそいつは語った。

「別に、受付でエントリーしているときにジュニアのガキどもが絡んできたのさ、青眼の白龍を手にするのは僕だつてさ」

やっぱり青眼が賞品なんだ。

「アタシはそんなもの別にどうだっていい。重要なのはデュエルアカデミアの推薦だ、あれさえあれば成績関係なく筆記試験免除、そしてアカデミア本校の実技試験が無条件で受けることができる。おまけに推薦枠で受ければ一年間学費免除だ。」

アカデミア本校志望か、たしか筆記試験の成績をもとに足切りしていつてそれぞれの点数に応じてアカデミア分校とかに振り分けていくんだっけ。

「それより、アンタ名前は？ アタシはサラ・アクロイド。アメリカ支援校からきた」

「俺は天領アイト、アイトでかまわない」

「よろしくな、アイト。私もサラでいぜ。少し気になってたんだがデュエルしに来たつてのはどういう意味だい？」

やっぱ、そこついてきますか。

「デュエルしに来たって意味はな、強いデュエリストと戦いに来たって意味だ」

そう、それ以上の意味はない。本気でデュエルしたい、それが今の俺の最大の欲求だ。

「なんだ中毒者^{ジャンキー}か私も似たようなもんだがな」

それからサラと俺は、こんな調子で他の出場者が入ってくるのを気にせず、サラの予言通りテレビで開会式の開催時刻がでるまで駄弁っていた。

そして開会式、控室から競技場内へ係員に誘導され、開会式の始まりと同時にその人はきた。

海馬コーポレーション二代目社長、海馬薫子が。

齢五十を越える女性の身にして、今だなお力を維持し続ける最強クラスのデュエリスト。白髪のかかった長髪を後ろでくくり、パンツスーツに白いコートを羽織るという、いつもテレビで見る姿でやって来た。

あれが自分の学校で中学生してましたー、なんて信じたくないな。

「ふうん、海外国内の支援校から76名、そしてジュニアリーグから72名、総勢148名、今日という日のためによく集まってくれた」

年相応な穏やかな声だが、最初にふうんって言う意味あんの？

「今日、この大会の形式は純粹なトーナメントになる。まず16人を一組とした8グループで予選をし、勝ち抜いた8人で決勝トーナメントをする！」

16人制トーナメントなら、計4回。8人制で3回か、キツいな。

「ふうん、あなたたちに言うことは、勝て、その一言に尽きる。最低決勝トーナメントに進出すればデュエルアカデミアの推薦状、さらに受かった場合一年間学費免除を、そして優勝者には我がしもべである青眼の白龍を、私自らが手渡そう！」

会場内は静まり返っていたが、今にも爆発しそうな雰囲気肌にかんじる。

俺のようにただデュエルを楽しみむという、酔狂な奴はそうそうとないだろう。

そして、青眼の白龍を手に入れるために欲望を丸出しにしたヤツ、サラのように自分の人生をよりよくしようとする者、そんな奴らが全力でしのぎを削ってデュエルしようとするんだぜ、俺にとっては最高の環境だ。

「あと、負けたヤツからとつと帰れ！ 148人もこのドームに収容していると場所をくってジャマで仕方がない。モチロン帰りのバスぐらいは用意しているがな」

ムードぶち壊しやがったぞこのアマ！

「それでは、ブルーアイズカップの開催を宣言する！ 一つのグループをAとし、A - 1、A - 2と書いた紙をくばる。そのグループ内の番号を呼ばれたやつからデュエルしていけ！ 以上あとはまかせる！」

最後テキトウすぎだろ……。そして配られた番号はA - 1だった、早速かよ！

「なあ、アイト！ お前何番だった？ アタシはD - 1だった」

サラが話しかけてきたが、その眼は控室で見たようなダルそうな感じではなかった、目じりは吊り上り完全に殺氣立っているのがわかった。

「俺はA - 1だよ、たぶんすぐに呼ばれると思うぞ」

『A - 1とA - 3！ 四番フィールドに上がりなさい！ 繰り返します…』

「ほらな！」

「ま、お互い決勝で会えるといいな」

だから目が笑っていないって！

「そうだな、じゃまたあとでな」

俺とサラはその場で別れ、自分の指定されたフィールドへ行き、デュエルディスクを展開し対戦相手がなんか言ってきたが、それを

無視しジャッジの宣言を待った。

『それでは、準備ができた様ですので、Aブロック第一回戦を開始します。 それではデュエルスタート!!』

さーて、どんなデュエルをできるのかな！

予選一回戦 サイバー流、ジュニアリーグ出身

「免許皆伝である、サイバー・エンド・ドラゴンがなければこんなもんだろ」

予選二回戦 ホルスデッキ、ジュニアリーグ出身

「クズ鉄のかかしは今日も絶好調！ 戦闘破壊できなければ成長できねえだろ」

予選三回戦 サイレントデッキ、ヨーロッパ校出身

「二回連続でレベルデッキって、マンネリを感じるな」

予選決勝 VWXYZデッキ 四国校出身

「おい、俺のデッキかよ。 VWは余計だろ」

『Aブロック決勝進出は天領アイト、天領アイトに決定しました』

「決勝トーナメントの開始は一時間半後の三時半から開始します。そのとき呼びに行きますのでここにいてくださいね。予選お疲れさまでした。そして、決勝進出おめでとうございます」

今、ガラッガラになった元の控室で菅原と弁当食ってるんだけどさ、この弁当がまたうまいんですよ。

え？ ほかの出場者？

ああ、アイツらなら負けたヤツからバスの中に放り込まれて、満タンになったところから連行されていきましたよ。ギョウギョウ詰めになったバスは走りにくそうだったけどな。

そして菅原は、自分と俺の分も弁当箱を片付けて部屋から出て行った。

「一時間半も時間あくのかよ、逆に気疲れするわ！」

気づいたら、独り言をつぶやいていた、どうも自分では気づかなかったが、想像以上にストレスがたまっているらしい。

予選思い返してみても、サイバー流とのデュエルは相手がリスベクトに縛られすぎていて素直に楽しめなかった、ホルス使いは小学生なためかコンボに失敗した途端、戦意喪失していた。サイレント使いは戦意こそ失わなかったがヤケクソになって魔法、罠を乱発して自滅した、VWXYZは決勝まで残る実力だったが、VWXYZすべてそろえようとして自分のプレイングを見失っていた。

「クッソ、全然楽しめやしねえ」

どいつもこいつも、中途半端。技術だけ成長し、心がまるで育ってない。

デッキでも見直すか？ 自分のすることがなく待つだけの状況もあいまってイライラが最高潮に達した時、タイミングよくサラが来た。

「アイト、ヒマだ。　ヒマすぎて死にそうだ」

それから、彼女と時間が来るまで駄弁っていたのだが、その内容はほとんど俺と似たような事を言っていた。

「アタシはもうほとんど目標自体は遂げてんだけどね、デュエルがつまらなくて不完全燃焼なのが不満なのさ…」

その言葉を最後に、サラを探しに来た担当と菅原に連れられ、会場内へ足を踏み入れた。

会場内の雰囲気は、サラを含めた7人によって異様としか言えない空間になっていた。

だつてさ、サラですら会場内に入った途端、威圧感丸出しにするし、他の連中は。

一人目のポロシャツにスーツの男は虚無感に満ちつつも、目は完全に生き、サラに負けずに威圧感をましたし。

二人目、三人目、四人目は、どこかで見たと思ったら、最近人気急上昇中のデュエリストアイドルだった、そいつら三人そろって、キツイ視線飛ばしまくっていた。ファンには絶対見せられねえな。

五人目はつなぎ姿でバンダナの男、たれ目だがスパナを手元でくるくる回しつつも、こちらの様子をさぐりまくっていた。

最後の六人目は着物姿の男で、一人壁に寄り添って精神統一しているようだった。

以上！ 選手紹介でした！

…何やってんの？ 俺は。

『それでは決勝トーナメントを開始します。 選手は指定された
フィールドへ行き、ジャッジの指示に従ってはじめてください』

もう、何も言うまい。

決勝第一回戦 アイドルの三番目：宣告者デッキ、ジュニアリー
グ出身

「ロックデッキがつまらないんじゃない、ロックを破れないヤツ
がつまらないんだ」

決勝第二回戦 着物姿の男：六武集デッキ、静岡校出身

「六武衆のにも免許皆伝の証であるデッキが存在するらしいな」

そして、決勝戦。相手は…。

「まあ、こんな気はしていたけどな」

「ハハハ、アタシもだ」

サラ・アクロイド アメリカ校出身、使用デッキ不明

今、思えば控室で会ったのが始まりだったのかもしれない。

でも、それはそれ、これはこれだ。今は関係ない。

「だが、さつきから気になってたんだが…。なんであいつら観客

席にいるんだ？」

そう、決勝メンバーが全員観客席にいるのだ。 負けたせいかな
囲気は落ち着いているが。

「あー、なんでも最後にまとめて推薦状とか渡すらしいぜ。それ
で決勝ぐらい見せてもいいんだってさ」

別に気にしたことじゃなかったか。

「そろそろ始めるか。サラ準備できているんだろ？」

「ああ、今すぐ始めようぜ！ ジャッジ！」

グラサン黒スーツが、フィールドに向かってデュエル開始をつげ
た。

「それでは、ブルーアイズカップ決勝戦を始めます！ デュエル
スタート！！」

「デュエル！！」

天領

LP 4000

手札 5枚

場なし

サラ

LP 4000

手札 5枚

場なし

「俺からの先行、ドロー！俺は手札からロックストーン・ウォリアーを召喚！」

《ロックストーン・ウォリアー》 攻1800/守1600

「さらにカードを二枚伏せターンエンド！」

さて、どう動く？

「アタシのターン！ドロー！…アイト、アタシの速さについてこれるかい！手札から永続魔法黒い旋風を発動！」

サラの周囲に黒い風が巻き起こる、さあ何が来る？

「そしてBF - 蒼炎のシユラを召喚！」
ブラックフェザー

《BF - 蒼炎のシユラ》 攻1800/守1200

ブラックフェザーか！

「さらに黒い旋風の効果発動！このカードは自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが召喚された時、自分のデッキからそのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ「BF」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる！アタシはデッキからBF - 黒槍のブラストを加える！そしてBF - 黒槍のブラストを手札から特殊召喚する！」

《BF - 黒槍のブラスト》 攻1700/守800

はい？

「BF - 黒槍のプラストは自分フィールド上に「BF - 黒槍のプラスト」以外の「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚する事ができるんだ。この時黒い旋風は通常召喚にしか対応できないから発動しないけどな」

へー、なるほど、なるほどってあれ？ やばくね？

「まだアタシのメインフェイズは終わっちゃいない！ チューナーモンスターBF - 疾風のゲイルを特殊召喚！」

《BF - 疾風のゲイル》 攻1300/守400

「BF - 疾風のゲイルもプラストのように自分フィールド上にBF - 疾風のゲイル以外の「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる！ さらに1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にする効果をもつ！ アタシはロックストーン・ウォリアーの攻撃力・守備力を半分にする！」

《ロックストーン・ウォリアー》 攻1800↓900/守1600↓800

「バトル！ BF - 疾風のゲイルでロックストーン・ウォリアーに攻撃！」

「ロックストーン・ウォリアーの効果発動！ このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。そしてカード

の攻撃によつてこのカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上にロックストーン・トークン2体を特殊召喚する！」

ロックストーン・トークン 攻/守0

ロックストーン・トークン 攻/守0 二体目

「ならBF・黒槍のプラストでロックストーン・トークンに攻撃！ このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与えることができる！」

序盤で1700のダメージは大きい！

「トラップ発動！ ガード・ブロック！ このカードは相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。その戦闘によつて発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウことができる！ プラストの貫通ダメージを0にし、一枚ドロウ！」

「ハッ、BF・蒼炎のシュラでロックストーン・トークンに攻撃！ そしてこのカードが戦闘によつて相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力1500以下の「BF」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる！ この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化されるけどな！ アタシはBF・銀盾のミストラルをデッキから攻撃表示で特殊召喚！」

BF・銀盾のミストラル 攻 100/守1800

「BF・銀盾のミストラルで直接攻撃！」
ダイレクトアタック

「クッ！」

天領LP 4000 ↓ 3900

「アイト、まさかこれで終わったと思っていたいかな？ アタシはBF - 銀盾のミストラルとBF - 黒槍のプラストをチューニング！」

2 + 4 = 6

「漆黒の力！ 大いなる翼に宿りて、神風を巻きおこせ！ シンクロ召喚！ 吹きすさべ、BF - アームズ・ウイング！」

《BF - アームズ・ウイング》 攻2300 / 守1000

「もう一回だ！ BF - 疾風のゲイルとBF - 蒼炎のシュラをチューニング！」

3 + 4 = 7

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！ シンクロ召喚！ BF - アーマード・ウイング！」

《BF - アーマード・ウイング》 攻2500 / 守1500

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

「エンドフェイズ終了時にトラップ発動！ トウルース・リインフォース！ デッキからレベル2以下の戦士族モンスター1体の特

殊召喚する！ 俺はスピード・ウォリアーを特殊召喚する！」

《スピード・ウォリアー》 攻 900 / 守 400

天領

LP 3900

手札 5枚

場 スピード・ウォリアー

サラ

LP 4000

手札 2枚

場 BF - アーマード・ウイング

BF - アームズ・ウイング

伏せ一枚

確かアームズ・ウイングはブラストと同じように貫通効果があったはず、そしてアーマード・ウイングは戦闘ダメージ0にする効果、戦闘破壊されないと戦闘に特化した能力、だが何よりも厄介なのは黒い旋風だ、伏せも気になるけどこの展開力とスピードに手段は選んでられない！

「俺のターン！ ドロー！ 手札から調律を発動！ このカードはデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルし、その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。俺はクイック・シンクロンを手札に加え、手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札からチューナーモンスタークイック・シンクロン特殊召喚！」

《クイック・シンクロン》 攻 700 / 守 1400

「…ほう、で、どうするんだい？」

「ボルト・ヘッジホッグを墓地から特殊召喚！ さらにブースト・ウォリアーを手札から特殊召喚！」

《ボルト・ヘッジホッグ》	攻	800	/	守	800
《ブースト・ウォリアー》	攻	300	/	守	200

「ボルト・ヘッジホッグ、たしかフィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、墓地から特殊召喚する事ができるカード。クイック・シンクロンのコストで送っていたか。そしてブースト・ウォリアーはフィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、手札から表側守備表示で特殊召喚する事可能だったはず。さてレベル8でなにを出すんだ？」

「クイック・シンクロンとボルト・ヘッジホッグ、ブースト・ウォリアーをチューニング！」

5	+	2	+	1		8
---	---	---	---	---	--	---

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

《ジャンク・デストロイヤー》	攻	2600	/	守	2500
----------------	---	------	---	---	------

「なっ、くっそ。 まずい！」

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材としたチューナー以外のモンス

ターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる！ 俺がシンクロ素材といたモンスターの数は二体！ 黒い旋風とBF-アーマード・ウィングを対象に破壊！ タイダル・エナジー！」

「黒い旋風はともかくアーマード・ウィングが！」

「バトル！ ジャンク・デストロイヤーでアームズ・ウィングに攻撃！ デストロイ・ナックル！」

サラLP4000↓3700

「あああつ！！ くつ、トラップ発動！ ブラック・サンダー！ 自分フィールド上に存在する「BF」と名のついたモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができ、相手フィールド上に存在するカード1枚につき、相手ライフに400ポイントダメージを与える！」

天領LP3900↓3500

「ぐあつ！ つつ、このままターンエンド！」

天領

LP3900

手札3枚

場 ジャンク・デストロイヤー

「ふー、アタシのターン！ ドロー！ アイト…、アンタがここまですると思わなかった。なにしろ、この大会でこのパターンが決まっちゃうとほとんど勝ってしまうからな！ だがアタシはた

だで終わる女じゃないよ！ 手札からBF・逆風のガストを特殊召喚！」

《BF・逆風のガスト》 攻 900 / 守 1400

「チューナーモンスターBF・極北のブリザードを通常召喚！このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル4以下の「BF」と名のついたモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる！ アタシはBF・黒槍のブラストを特殊召喚！」

《BF・極北のブリザード》 攻 1300 / 守 0

《BF・黒槍のブラスト》 攻 1700 / 守 800

「BF・極北のブリザードとBF・黒槍のブラスト、BF・逆風のガストをチューニング！」

2 + 4 + 2 = 8

「吹き荒べ嵐よ！ 鋼鉄の意志と光の速さを得て、その姿を昇華せよ！ シンクロ召喚！ BF・孤高のシルバー・ウィンド！」

《BF・孤高のシルバー・ウィンド》 攻 2800 / 守 2000

さすがだ！ フィールドを空にされてもあつという間にレベル8シンクロ召喚にまでつなぐなんて！

サラ！ 俺はここまで楽しかったのは久しぶりだ！

「BF・孤高のシルバー・ウィンドでジャンク・デストロイヤーを攻撃！ ブラック・トーネード！」

天領LP3300

「ぐはっ、つく。ハハハハハハハ！ 楽しい！ 楽しいな！
サラ！ デュエルはやっぱりこうじゃねえと盛り上がらねえ！」

「まったくだ、アタシもここまで面白く感じたのは久しぶりだ！
カードを一枚伏せてターンエンド！」

サラ

LP3700

手札0枚

場 BF - 孤高のシルバー・ウィンド
伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！ 俺は手札からレベル・ウォリアーを特殊召喚する！ そしてレベル・ウォリアーは相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはレベル4モンスターとして扱うことができる！」

《レベル・ウォリアー》 攻 300 / 守 600

「チューナーモンスタージャンク・シンクロンを召喚！」

《ジャンク・シンクロン》 攻1300 / 守 500

いくぜ、サラ！ お前に力があるというならこのカードも次のターンで倒せるはず！

「ジャンク・シンクロンとレベル・ウォリアーをチューニング！」

3 + 4 = 7

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！シンクロ召喚！吠えろ、ジャンク・バーサーカー！」

《ジャンク・バーサーカー》 攻2700/守1800

「まだ…、シンクロ召喚できるなんてな。アイトやっぱりお前みたいなデュエリストと出会えてよかったよ」

「なにもう終わったって顔してやがる！ ジャンク・バーサーカーの効果発動！ 相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する！ 選択した相手モンスターの攻撃力は除外したモンスターの攻撃力分ダウンさせる！ 俺はジャンク・デストロイヤーを除外し、BF - 孤高のシルバー・ウィンドの攻撃力をダウンさせる！」

《BF - 孤高のシルバー・ウィンド》 攻2800 ↓ 2000 / 守2000

「ジャンク・バーサーカーでBF - 孤高のシルバー・ウィンドに攻撃！ バーサーク・アックス！」

サラLP3700 ↓ 1200

「ぐあああああ！ はあつ、はあ。 まだだ、まだデュエルは終わっちゃいない！ 次が勝負だ！ アイト！」

「ああ、こい！ どんなカードを見せてくれるか、楽しみだ！」

天領

LP 3500

手札 2枚

場 ジャンク・バーサーカー

「さあ、アタシのターン！ ドロー！！ ……手札から終わりの始まりを發動！」

ははっ、これこそがデュエルだ！ 最後のドローまで何が起こるかわからない！ このドキドキとわくわくがたまらないんだ！

「あたしは墓地に存在するBF - 逆風のガスト、BF - 極北のブリザード、BF - 銀盾のミストラル、BF - 蒼炎のシュラ、BF - 孤高のシルバー・ウィンドを除外し、3枚ドロー！！」

たった一枚が三枚かよ！ 間違いない、サラのデュエルセンスは本物だ！！

「BF - 暁のシロツコをリリースなしで通常召喚！」

《BF - 暁のシロツコ》 攻2000 / 守 900

「そしてダーク・バーストを發動！ このカードでBF - 疾風のゲイルを墓地から手札へ！ BF - 疾風のゲイルを特殊召喚！」

《BF - 疾風のゲイル》 攻1300 / 守 400

「BF - 疾風のゲイルの効果發動！ ジャンク・バーサーカーの攻撃力・守備力を半分にする！」

《ジャンク・バーサーカー》 攻2700 ↓ 1350 / 守1800
0 ↓ 900

「BF - 暁のシロッコでジャンク・バーサーカーに攻撃！ ダークウイングスラッシュ！」

天領LP 3500 ↓ 2850

「ぐっ」

「BF - 疾風のゲイルで直接攻撃！ ダイレクトアタック ブラック・スクラッチ！」

天領LP 2850 ↓ 1550

「があああ！」

「これで最後だ！ トラップ発動！ リビングデッドの呼び声！ このカードによってアーマード・ウイングを墓地から特殊召喚！」

《BF - アーマード・ウイング》 攻2500 / 守1500

「BF - アーマード・ウイングで直接攻撃！ ダイレクトアタック」

「させん！ 墓地からネクロ・ガードナーを除外し、相手モンスターへの攻撃を1度だけ無効にする！」

「！！ いつ墓地へ送った？！ あっ！ 調律の効果でか！」

正解！

「ならアタシはBF・疾風のゲイルとBF・暁のシロツコをチュ
ーニング！」

3 + 5 = 8

まだ…、シンクロ召喚できるんだな。 さすがだ。

「黒き疾風よ！ 秘めたる想いをその翼に現出せよ！ シンクロ
召喚！ 舞い上がれ、ブラックフェザー・ドラゴン！」

《ブラックフェザー・ドラゴン》 攻2800/守1600

「アイト！ これがアタシの切り札だ！ アンタ、アタシを乗り
越えることができるか！ これでターン・エンド！」

サラ

LP1200

手札0枚

場 ブラックフェザー・ドラゴン

BF・アーマード・ウィング

おそらく、次のターンで勝負は決まる！ このドロ…、すべて
をかける！

「俺のターン！！ ドロー！！ 俺は戦士の生還を発動！ ジャ
ンク・シンクロンを墓地から手札に！」

そしてジャンク・シンクロン召喚！ ジャンク・シンクロンの効
果でレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する
事ができる！ 俺はスピード・ウォリアーを特殊召喚する！」

《ジャンク・シンクロン》 攻1300/守 500
《スピード・ウォリアー》 攻 900/守 400

「このとき、スピード・ウォリアーを墓地から特殊召喚に成功したとき、ドッペル・ウォリアーを手札から特殊召喚する！」

《ドッペル・ウォリアー》 攻 800/守 800

「ジャンク・シンクロンとドッペル・ウォリアーをチューニング！」

3 + 2 = 5

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻2300/守1300

「そしてドッペル・ウォリアーの効果でドッペル・トークン2体を攻撃表示で特殊召喚する！」

ドッペル・トークン 攻/守400

ドッペル・トークン 攻/守400 二体目

「ジャンク・ウォリアーの効果！ シンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする！ パワー・オフ・フェロウズ！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻2300↓4000/守1300

「攻撃力4000つだと!？」

「バトル! ジャンク・ウォリアーでブラックフェザー・ドラゴンを攻撃! これで決まりだ!! スクラップ・フィスト!!」

「ハッハ…。これで終わりか、楽しかったな。このデュエル…、ハハッハハハハハ!」

サラLP1200↓0

『…このデュエル天領アイトの勝利をもって、ブルーアイズカッブ優勝者は天領アイトとする!』

最後に締めくくったのは社長だった、美味しいともっていきやがって。

その後、さつさと表彰式とか社長が終わらせたいらしく、あまりサラと話せなかったが、他の連中がなんか信じられないものを見たって顔が傑作だったぜ!

そこで今表彰式やってんだけどさ、ポロシャツスーツは推薦状受け取ってボーっとしてる、アイドル三人組はうれしいのか落ち着きがない、バンダナつなぎはそれがデフォルトなのか知らんが終始ニヤニヤしてた、着物野郎はさすがに落ち着いて受け取ってたけど俺は見たぞ、もらった瞬間ニヤついたの。

そして、サラはデュエルが終わってから完全燃焼したって感じで、黒コートが白く見えるほどだった。

最後に、俺は…。

「あのー、なんで青眼の白龍のイラストが社長の持つ三枚とちがうんですか？ あと、この伝説の白石って…」

そう、青眼のイラストが違うのだ、青い背景にたたずむ姿でなく、赤っぽい背景に飛び立とうとしている姿なのだ。

「ふうん、なぜ私の持つ三枚と同じイラストである必要がある？
ありがたく思え！ イラストを変えたおかげで四枚目だとわかりやすいだろう！ 伝説の白石に関してはオマケだ、チューナーモンスターだからな、シンクロを多用するお前のデッキには最適だろう！」

ああ、これが菅原の言っていたサポートカードってやつか。

おい、お前ら！ サラはともかくそんな欲しそうな目で見んな！
やらんぞ！

「あと、そのカードと青眼は普通にデュエルで使ってもいいかわん。使わなければ意味がない、じゃなければこんな興業利益のない大会なんて開かないからな！ そして、これがデュエルアカデミアの推薦状だ。

おっと、中を開けるなよ！ それを入試要項とともに出せばいい、それで受理される」

テレッテッテッテー！ アカデミアの推薦状を手に入れた！

「ふうん、これで私のすべきことは終わった！ 各自、家に帰るなり好きにしろ！」

あー、終わったー！ 濃いようで薄いような一日だったな。

さて、この推薦状どうすっかなー。別に親は進路は好きにしてもいいが、ちゃんと報告しろって言ってるしな。

「おい、アイト！ お前もアカデミア来るよな？」

うーん、別に行ってもいいんだけど、アカデミアに進んだからって、強いやつとデュエルができるってわけじゃないし。プロになれるのかって言われたら、狭き門、つまりプロテストを受けて受かるのか、スポンサーはつくのかって限らないしな。

「アイト！ 聞いてんのか！」

逆に一般高校を受けたら、大学の進学は決まってるようなもんだし。まともな就職は親に聞けば一応俺のポストは用意してあるって言っし、そこまで親に頼りたくないんだよな…。

だったら、一か八かデュエルアカデミアにいつてみるか！

「よしっ！ アカデミアにいこう！」

「おっ！ お前、やっぱりアカデミアに行くのか！」

「あん？」

気づいたらサラが横に立っていた。そういえば横で話しかける声が聞こえたのはコイツの声か！

それにしても、コイツやっぱ背高いな。顔見るだけで見上げてしまったぞ。

「そうか、お前も受けるのか、それだけ聞けば十分だ。アタシはこれで帰るから。受験の日にまた会おうぜ！」

二カっ、といい笑顔を見せた後、サラはさっさと出口へ歩いて行った。

俺も帰るかな。

こうして、丸一日使って行われた非公式大会ブルーアイズカップは終了した。

あつ、親父にデュエルアカデミア行くなって連絡入れねえと。

海外の時差って、いまいちわからねえんだよな。

ま、いいや。家についてから電話してみつか。

第二話 黒い風に氣に入られたかな（後書き）

文章の長さって、これくらいですかね？

やっぱり長すぎですか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8755y/>

レッツゴー デュエリスト！

2011年12月2日20時52分発行